慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	飯島渉著, 『ペストと近代中国 : 衛生の近代化と社会変容』
Sub Title	W. Iijima, Plague and modern China, Tokyo, 2000
Author	戸部, 健(Tobe, Ken)
Publisher	三田史学会
Publication year	2001
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.70, No.3/4 (2001. 7) ,p.341(691)- 349(699)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20010700-0341

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

飯島渉著『ペストと近代中国―衛生の近代化と社会変容―』

戸部　健

一

長年近代中国の「衛生史」に携わってきた飯島渉氏の著書がついに公にされた。著者の研究はこれまでも独自の分野を切り開くものとして注目を集めてきたが、本書はそのいくつかを編み直し、東京大学大学院に博士学位請求論文として提出したものである。それは単に論文を集めただけのものではなく、内容に関しても改めてかなりの手が加えられており、読者の多くはそこに新たな発見を体験することになる。

『ペストと近代中国』という書名は一見、中国における疫病史の研究を連想させる。だが、本書を通読したとき、それは早計にすぎることに気づく。ここで取り上げられた「ペスト」は疫病の範疇のみに止まらない。近代中国においては、ペストの蔓延によって顕在化した様々な要素が以後の社会を大きく変えることになる。本書はそうした様々な要素の中で「近代中国における衛生の制度化」の問題を研究し、それを通して中国近代史に新たな提起を試みている。そこで本稿では以下、本書の内容を紹介し、併せてそれに対する私見を述べることにしたい。

二

まず、本書の構成について記す。

序章　伝染病・衛生・国家

一　本書の課題　二　伝染病の流行と衛生の「制度化」　三　近代中国における衛生の「制度化」　小結　本書の構成

第一章　腺ペストの世界化―一九世紀末から二〇世紀初頭―
はじめに　一　一八九四年、腺ペストの流行　二　一九〇〇年、ハワイ黒死病事件　三　一九〇二年から一九一三年、横浜　小結
第二章　腺ペストの流行と衛生の政治化
はじめに　一　一八九九年、営口における腺ペストの流行　二　衛生の政治化と近代中国の衛生行政　小結
第三章　日本の台湾統治と腺ペスト・マラリア
はじめに　一　近代日本の衛生行政　二　腺ペストの流行と日本の台湾統治　三　台湾統治とマラリア　小結
第四章　満州における肺ペストの流行―一九一〇年から一九一一年―
はじめに　一　満州における肺ペストの流行　二　清朝政府の対応　三　北京、天津、上海　小結
第五章　肺ペストの流行と衛生の政治化―一九一〇年から一九一一年―
はじめに　一　関東州・大連の衛生行政　二　肺ペスト対策の展開　三　碧山荘苦力収容所　小結
第六章　民国初期における衛生の「制度化」―中央防疫処を中心として―
はじめに　一　民国初期の衛生行政　二　中央防疫処の設立　三　衛生行政の展開　小結
第七章　一九一九年のコレラ流行
はじめに　一　コレラの流行、一九一九年　二　上海、哈爾浜、横浜　三　中央防疫処のコレラ対策　小結
第八章　衛生の「制度化」の国際的契機―シンガポール伝染病情報局の設立―
はじめに　一　近代中国と検疫　二　国際連盟とシンガポール伝染病情報局　三　衛生と国際秩序　小結
第九章　衛生の「制度化」と検疫権の回収
はじめに　一　「全国衛生行政系統大綱」と衛生行政　二　衛生の「国家化」と検疫権の回収　三　近代中国における衛生の「制度化」　小結
補論　近代東アジアにおける伝染病の流行
はじめに　一　近代中国　二　台湾、関東州、樺太、朝鮮、南洋群島及び日本　三　近代東アジアにおける伝染病の流行　小結
終章　近代中国における衛生の「制度化」と社会変容

総じて言えば、本書は腺ペストが世界的に普及した一

八九四年から辛亥革命を経て国民政府時期に至るまでの間に、中国が帝国主義国家の圧力の中、衛生についてどのような対応をとってきたのか、またその衛生行政を通じて民衆とどのような関係を取り結ぼうとしてきたのかについて述べたものである。その内容を略述すると次のようになる。

それまでは地方官に任せきりであった中国の衛生は、以後徐々に清朝政府自身の手で「制度化」されていく。その背景には腺ペストの流行があった。検疫の実施は腺ペストの流行が契機となった。その際、中国は欧米や日本の占領行政において提起された衛生に含意された「近代性の構造」を積極的に導入した。二〇世紀初頭、近代中国が直面した「近代性の構造」は、対外的には欧米及び日本の植民地主義的な衛生事業への介入に対抗する衛生の「制度化」の必要性、対内的には統治機構の再編過程での衛生の「制度化」の必要性、という衛生が持つ二重の政治性を顕在化させた。一九一〇年から一一年の満州における肺ペストの流行を契機に衛生の「制度化」は国家が衛生事業を行政化することによって、個人の身体を規律化すること、統治機構を再編することを志向するものとなり、善堂などの民間団体を権力機構に再編していく方向性を示すことになった。すなわち衛生の「制度化」は社会秩序の再編の契機にもなったのである。しかし、対内的な「制度化」は中央防疫処などの努力にもかかわらず、その後国民政府期に至っても衛生事業全般を行政化しえず、その実施は都市や一部の農村地帯に限定されたものであった、他方、対外的な「制度化」は、一九三〇年の検疫権の回収を一つの到達点としたのである。

三

本書の特徴は近代中国における「近代」という時代性を改めて問い直している点である。著者は「歴史の連続性」、すなわち「変わらぬ中国」に関心を寄せる近年の中国近代史研究の動向に対して、それは「中国社会の特徴を理解するための有効な視角である」と評価しつつも、そのために「中国社会が直面した近代世界のもつ意味への理解が希薄になってはいないだろうか」との疑問を投げかけている。そして「近代世界は、それ以前に比べればよほど均質性、同時性をもった時代であった」と考え、そうした均質性、同時性を支えた制度である「近代性の構造」が中国社会にいかなる影響を及ぼしたのか、あるいは及ぼさなかったのかを具体的に明らかにすることの

重要性を提起している。

従来の研究は、近代中国研究においても、近代化と表現されるいくつかの方向性が現実に選択されたことを明らかにしてきた。すなわち、ここでいう「近代化」とは人々の生活が封建的な遺制と一九世紀半ば以後の欧米諸国及び日本の帝国主義的な中国進出から「解放」される過程であり、または経済成長のための工業化が達成される過程[1]であると考えられてきた。また、「歴史の連続性」に注目しながら、朝貢（貿易）システムを基礎とする中国社会の商業ネットワークの展開から中国社会の歴史的展開を論じる場合もあった[2]。しかし、著者は近代中国が直面した「近代性の構造」は、このような解放、工業化、またはそれにかわる枠組から理解するだけでは不十分であると主張する。そして「近代性の構造」には「近代世界における国家のあり方、就中、国家と個人がいかなる関係をとり結ぶか、そのための社会の『制度化』の問題があった」とし、近代中国の歴史において、再度社会の「制度化」の文脈から検討する必要を呼びかけている。

こうした提起をふまえた上で、著者はこの問題を「衛生」の研究を通して読み解こうとする。著者は「近代世界においては、衛生の『制度化』は、国内統治政策として統治機構や社会制度の変化の契機となると同時に、植民地主義の展開や植民地化された地域の社会構造にも大きな影響を及ぼすものであった」とし、「衛生の『制度化』は、すぐれて『近代性の構造』を体現するものにほかならなかった」と述べている。また、「近代化」に関連する問題として、近代中国において「何ゆえ『強い国家』の建設が目指されたのか」という極限的な問いを発している。この答えとして「近代中国社会は、ペスト（腺ペスト、肺ペスト）の流行への対応の中で、…衛生に含意されたある意味での価値を導入せざるをえなかったと考えられる」と述べ、さらに「近代世界が提起した『近代性の構造』のうちのいくつかの問題は、中国社会がこれに直面したとき、それに対処せずにはいられなかった問題なのではないだろうか」と主張する。著者はこれまで「制度改革が何ゆえ近代国家的な統治形態を志向するものとなったのかはほとんど問題にされてこなかった」とし、その原因を「二〇世紀を生きてきた我々が、近代国家的な統治形態を受け入れているために、それ自体の歴史性を問題としてこなかったことを意味している」点にあると考えている。

本書の右に挙げた特徴に対して、評者が第一に評価す

るのは、いわゆる「西洋の衝撃」アプローチの批判以来注目されることが相対的に少なくなった近代中国における西洋の影響に、もう一度スポットライトを当てているところである。近年の中国近代史研究が「歴史の連続性」に関心を寄せているのは確かである。しかし、中国近代史における西洋の影響から解放された中国像を追い求めることに熱心なあまりに、西洋の影響が本当にあった分野（社会の上層レベルなど）に関する研究がさほど顧みられなくなったのも確かである。著者は衛生の「制度化」を論じることで、中国政府が近代国家的な方法で民衆との関係を取り結ぼうと模索したことを実証する。今後は、国家の役割を強めるために行われた教育や医療、救貧などの「制度化」についてもさらなる研究がなされることになろう。

第二に評価するのは、本書が日本の中国史研究において衛生という問題に初めて着目した書であるという点である。日本史や西洋史では、「衛生史」という分野は既に大きな業績を挙げている。[3] それは例えば伝染病と都市化の関係や伝染病と部落差別問題との関係などから「伝染病をめぐる言説」の研究まで様々な成果が生まれている。しかし、東洋史においては研究の数が少なく、特に日本人の研究としては、ほとんどなかったといってよい。このような重要な分野に東洋史として先鞭をつけたことは大変大きな意味がある。衛生史はまだまだ可能性を秘めた分野であることには変わりなく、今後、本書を踏み台に中国衛生史が盛んになっていくことが期待される。

第三に評価するのは、膨大な史料を集め、それに基づいて詳細な検討をしている点である。近年、歴史研究における档案の利用が一般化してきた。それは、以前に比べてさらに詳細な研究ができるようになったことを意味する。本書は東アジアという広大な領域において、しかも清末から国民政府期という長期的スパンにおいて档案を用いた「広く、長く、詳細な」研究に成功している。本書に費やされた労力は計り知れない。国内はもちろん、台北、北京、天津、瀋陽、上海、南京、香港などの档案館の所蔵史料を網羅しており、研究の性格上当然のことかもしれないが、これだけの広い範囲にわたって史料を集める著者の努力に改めて敬服する。また、そうした資料・文献を載せた巻末の一覧はまだまだ研究蓄積の少ないこの分野を研究する後学にとってはまさに重宝すべきものである。

四

本書の研究領域は広く、また方法としても歴史学に止まらず、社会学、医学、統計学など様々な学問分野にかかわる研究であるゆえ、その批評はもとより評者の任に耐えうるものではないが、以下本書の抱える問題点をいくつか挙げておきたい。

まず、第一は「衛生」の意味である。著者は「肺ペスト対策の展開の中で、山東苦力への排除が行われたことは、衛生の『制度化』の中で、中国社会が衛生の観念を受け入れるようになったことを示すものである」とあるように、「衛生の観念」という表現を用いている。思うに、中国社会が受け入れられつつあった「衛生の観念」とはどのようなものであったのか。この点について本書は明示していない。古来中国にも「衛生」という語はあった。しかし、そこでいう「衛生」の意味は養生の意味に近く、要するに病から身を守り、健康を増進し、可能な限り延命して不老不死までに到達しようとするものであった。その内容は食生活の管理、呼吸法、医薬の適確な処方、快適な住環境の整備など多岐にわたる。(4) そうした「衛生」を養生と定義するとすれば、近代において諸外国で受け入れられた「衛生」は明らかにそれとは異なるものになろう。即ち近代における「衛生」とは細菌学を基礎とした科学であり、それに基づく行政であった。それはまた病気から個人や社会集団を予防するためのシステムであった。それゆえ近代の「衛生」は公衆衛生と定義される。(5) そうすると、著者が本書で述べた中国社会が受け入れつつあった「衛生の観念」は、果たして養生であるのか、それとも公衆衛生であるのか。もし中国社会が公衆衛生の観念を受け入れつつあったと考えるのならば、それは納得し難い。なぜならば、当時国家による衛生教育はなされておらず、新聞などにおける衛生の言論も不統一であったからである。この裏にはクロイツアー氏が述べた中国医学と西洋医学の激しい争いがあった。(6) 従ってこの時代、中国社会が受け入れた「衛生の観念」にはかなりばらつきがあったのではないか。少なくとも近代的な「衛生の観念」が日本や西欧のようにスムーズに受け入れられたと考えることには抵抗を感じる。近代化を志向した政府における「衛生」は公衆衛生であったことは間違いないが、民衆レベルの「衛生」を考えた場合、それはもう少し検討を要する。こうした問題は中国人の衛生観や隔離に対する考え方にも関連する重

要な問題ではなかろうか。また、このような分野には当然「中国に即したアプローチ」が依然として有効かつ必要であると考える。

第二の問題点は、衛生行政の進展に関することである。著者は、近代中国のおける衛生行政は北京政府期から進展しており、国民政府期との断絶はなく、むしろ連続していると述べている。そしてそのモデルとして一九一一年～三五年の北京における一連の衛生行政を数章にわたって挙げている。確かにそのような連続性は認められるものの、それが在地において具体的にどのような進展を見せたのかという問題については北京の例をもってしても捉えにくい。要するに衛生関係の部局が、著者の述べているような衛生行政を断続的に行っていたかという問題である。たとえば第六章では一九二五年に設立された北京公共衛生事務所によって行われた衛生行政について述べているが、その記述はその年にのみ止まっている。また、第九章では、国民政府成立直後の一九二八年において北平特別市衛生局による衛生行政について述べるが、その後の記述は六年後である一九三四年の北平市第一次衛生運動大会に飛ぶ。これだけ見るとこれらの衛生行政に連続性を見出すことは困難であり、その間に断絶があるとする可能性をあながち否定できない。その原因は、おそらく本書が章によっては档案に大きく依拠しているためであると思われる。档案の利用により歴史研究は以前では考えられないほど詳細な研究が可能になった。しかし、档案に全面的に頼るのは若干の問題があり、档案をもってしても再現できない空白部分は多々残るのである。この場合、やはり従来からの史料、すなわち新聞や雑誌などの刊行物の利用はなお有効であり、それらを用いて時間的な空白を埋めることで、さらに実証的な結論が導けるのではないかと思われる。

第三は「制度化」の問題である。前述したように、著者は近代世界が提起した「近代性の構造」に対して近代中国が衛生の「制度化」を志向していく過程について具体的に論じており、その点については大いに評価できる。しかし、そうした「制度化」は中国社会に従来からある秩序にどのような影響を及ぼすものであったのだろうか。今後は「制度化」の影響についてより突っ込んだ研究がなされるべきであろう。これは例えば著者が課題として掲げているように、「制度化」に対する民間社会の対応が挙げられるが、そのためには民衆と実際に交流をしていた末端機構の動きなどについても検討されねばなるま

い。そうすることによって、中国でどうして「制度化」が容易に進展しなかったのかという問いに対し、国家の上層の問題（財政的問題など）からだけでなく、下層の問題―ここにすぐれて中国独自の問題が見出されるであろうと考えられる―からも答えを導くことができると考えられる。その他にも本書で取り上げられた都市以外の地域における「制度化」の具体的な進展状況についても見ていかねばならない。なぜならば、そうした問題を見ることで著者が本書で述べてきた衛生の「制度化」の規模を計ることができるからである。

五

以上、本書に対して思うところを挙げた。著者も本書で述べているように、中国の衛生に関して残された課題は依然として多い。例えば、衛生の「制度化」に関しても産婆の「制度化」や軍隊衛生、労働衛生などの分野における研究課題がある。今後これらの課題は一つ一つ解明されていくべきである。その意味ではこうした問題を研究する入り口に我々を導いてくれた本書の功績は大きく、本書をステップにして中国衛生史の研究をめざす若手研究者が増えるのは疑いない。またそうしたことは、中国以外の衛生史研究からも期待されることであろう。「国民国家」の限界が叫ばれて久しい。今後我々は国家とどのような関係を取り結んでいくか、このいまだ答えのない難問についてそれぞれ考えていかねばならない。しかし、本書のあとがきが触れているように、国家と国民が取り結ぶ関係が変化するであろう二一世紀を生きる我々にとっては本書の刊行を契機に二〇世紀における社会の「制度化」について考えることも大変有意義なことのように思われる。

註

（1）久保亨『中国経済100年のあゆみ―統計資料で見る中国近現代経済史―』創建出版、一九九一年（第一版）、一九九五年（第二版）。

（2）濱下武志氏の一連の研究（『中国近代経済史研究―清末海関財政と開港場市場圏―』汲古書院、一九八九年、『近代中国の国際的契機』東京大学出版社、一九九〇年、『朝貢システムと近代アジア』岩波書店、一九九七年）。

（3）見市雅俊「公衆衛生の発展と身体の規律化」（柴田三千雄等編『世界史への問い（五）規範と統合』岩波書店）、一九九〇年。安保則夫『ミナト神戸　コレラ・ペスト・スラム―社会的差別形成史の研究―』学芸出版社、一九八九年。柿本昭人『健康と病のエピステーメ―一九世紀コレラ流行と近代社会システム―』ミネルヴァ書房、一

九九一年、など。

(4) 中国古代の養生思想については坂出祥伸編『中国古代養生思想の総合的研究』平河出版社、一九八八年。

(5) これらの定義は小野芳朗『〈清潔〉の近代―「衛生唱歌」から「抗菌グッズ」へ―』講談社、一九九七年、による。

(6) Ralph, C. Croizier, *Traditional Medicine in Modern China : Science, Nationalism, and the Tensions of Cultural Change*, Canbridge, Harvard University Press, 1968.（難波恒雄等訳『近代中国の伝統医学―なぜ中国で伝統医学が生き残ったのか―』、創元社、一九九四年）。

（研文出版、二〇〇〇年一二月刊、A5、三八〇頁、九〇〇〇円）